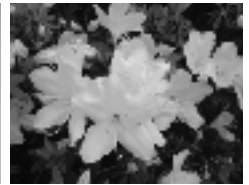


# カトリック山形教会報 **かすみ** 5

2012.5.27



カトリック山形教会

〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590  
ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



4月8日(日)復活の主日 ミサ後十字架リレーの十字架を掲げ記念写真

2012年4月7日 復活徹夜祭説教

## 『ガリラヤへ行け。そこで私に会える』

カトリック山形教会主任司祭 本間研二

私たち山形教会で、このミサの中で2人の方が洗礼を受けられます。私たち共同体の仲間が、また2人増えます。

4月は色々な方々が山形教会に集まりました。先程朗読された、シスター木田もそうです。4月からいらっしやいました。先週初めていらした大学生の姿も見えます。また、仙台からいらした方がそこにいらっしやいます。稲江さんですね。稲江さんはカリタスジャパンの職員で、今仙台のサポートセンターで働いています。震災があったときすぐ仙台に入って、色々なボランティアの方々のお世話をなさっている方です。

山形教会も中継基地でした。震災の後、様々なところから物資がきまして、たくさんの方が仕分けをして荷物を作ってくれました。私も何回か被災地に行きました。私がしたのはただ荷物を運んだというだけで、むこうの方との接触はありませんでした。でも、震災があってから2週間ぐらい経った頃でしょうか。東仙台のオタワ会の修道院に寄らせてい

ただきました。まだ電気が復旧していない時で、とても寒かったのを覚えています。

たまたま修道院には、亙理教会の信徒会長さんがいらっしやいました。まだ震災から、2、3週間しかたっていないということで、その会長さん自身、教会の信徒の方々の動向をはっきり掴めてはいませんでした。ただ、「2人の方が亡くなったようだ。たくさんの方が家を流されたようだ」 そんなことを青い顔して震えながら私に語ってくださいました。その方が私に言いました。「神父さん、もう心がズタズタです。何もできないです。祈ることすらできません。祈ろうと思っても、祈れない。そんな状態です」 そうおっしゃったのを今でも覚えています。祈ろうと思っても祈れない。もしかしたら、私たちもそうなのかもしれません。自分の生活を根底から揺さぶられた時、もしかしたら私たちは、祈ることすらできなくなっているのではないか。例えば、重い病気を

(2面につづく)



4月6日(金)主の受難 「見よ、キリストの十字架、世の救い。」



4月7日(土)復活徹夜祭 村川智実さんと市中博さんが洗礼の秘跡にあずかる。

告げられた時、大きな事故にあったとき、心が痛むような人間関係、そのようなことがあったとき、私たちはもしかしたら、祈れないかもしれない。そんなふうに思いました。

実は私にもそんな経験がありました。心がズタズタになって逃げてしまいたい。消えてしまいたい。いなくなってしまう。そんな時がありました。全く恥ずかしいですけれども、神父でありながら、祈ることすらできなかった。そんな日々がしばらく続きました。そんな時、ある教会から黙想会を頼まれたのです。本当は断りたかったのですが、断る元気もありませんでした。はい、と返事をしてしまいました。2日間の短い黙想会でした。2日間といっても、たくさんの方の前でお話をしなければいけませんから、ある程度の準備はしなければいけません。でも、準備もできませんでした。本来であれば、黙想会で皆さんの前でお話するときには、やはり祈っていかなければいけません。祈りもできない。準備もできない。そんな状態で、ある教会に行きました。土曜日と日曜日、何とか皆さんの前でお話をしました。何とか話す事ができたのです。しかし、自分の中では虚しかったです。黙想会が終わって帰ろうかなと思ったとき、一人のおばあちゃんが来ました。彼女はこう言ったのです。「神父さん。神父さんは祈られた方ですね」ドキッとしました。僕の中では「祈っていないのですよ。申しわけないけども、祈らないできたのですよ。勘違いですよ」 そう叫んでいました。でも、それを悟られまいとして、笑顔を作って「ありがとう」と言って山形に帰ってきました。

「あなたは祈られた方ですね」 帰ってからもしばらく、その言葉が心から離れませんでした。「祈られた方」でも私は考えてみて、ふと思いました。私はもしかしたら、勘違いしたのかもしれない。そのおばあちゃんが「あなたは祈られた方ですね」といったのは、「あなたは、誰かに祈られている人ですね」と、そう言ったのではないかなと、気が付きました。心がズタズタで自分の力では何もできない。自分の努力でも自分の経験でも問題を解決できない。そんな私の心が空っぽの時、何もないとき、もしかしたら、私は祈られて

いる。何もできない私のために、祈ってくださっている人がいる。いや、誰一人祈っていなくても、きっとあの方だけは、きっと私のために祈ってくださる。そう思いました。

今日マグダラのマリアとたくさんの婦人たちがイエスの元に行きました。でも、行って婦人たちが見たのは空の墓でした。イエスはいない。何もない空の墓でした。でもそれこそが、私たちの真の姿かもしれない。いくら「自分がこんな事ができる。こんなにたくさんの経験をしてきた。だから俺はできる。俺には力がある」と思っても、そんなものは、何の役にも立たない。空なのだよ。お前は空なのだよ。何もないのだよ。空の墓。空の自分。それに気が付いた時こそ、イエスとの本当の出会いの時となるのではないのでしょうか。マグダラのマリアも、婦人たちも、ペトロも、空の墓、何もない自分の心、それにまっすぐ向かい合うことができたとき、初めて本当の意味でイエスとの出会いがスタートしたのです。

今日私たちは自分の心を見つめています。空です。何もない。私たちは、ただ神の恵みによって生かされている。そのことに私たちは気が付くのではないのでしょうか。そんな私たちにイエスは言います。「ガリラヤへ行け」

ガリラヤとは一体、どこでしょうか。ガリラヤとは、イエスが宣教し、イエスが弟子達と寝食をともにし、ともに笑い、ともに泣いた場。まさにガリラヤこそ、イエスが日々の生活を営んだ場だったのです。あなたのガリラヤはどこですか。どこか遠いところですか。そうではありません。私たちのガリラヤ、それはまさに私たちが日々の生活を営んでいる、この場所です。楽しいことだけではない。嬉しいことだけではない。辛さも、悲しみも、苦しみもある場。そここそが、あなたのガリラヤです。そこに向け、とイエスは言います。日々の生活の中で、何もない空の私。でもイエスから祈られている私。イエスから、支えられている私。その私を携えて、日々の生活を生きよ。イエスは私たちにそう言っているのです。心の耳を澄ましましょう。今も私たちにイエスの言葉が響いてきます。

恐れずに「ガリラヤへ、行け」

## 春を連れてきた十字架リレー



4月1日(日)枝の主日 長井教会から十字架リレーが山形教会に届けられた。

4月1日(枝の主日)に、新潟教区百周年の事前記念事業である「十字架リレー」の十字架とリレーノートが長井教会の二人の信徒によって山形教会に届けられた。ちょうど聖週間が始まるタイミングで引き継がれる恵みをいただいた。十字架が聖堂の祭壇に掲げられ、山形に留まる2週間の間、多くの信徒が思い思いの祈りを捧げた。

4月8日(復活の主日)、フィリピンから来られた神父と神学生、そして前日の復活徹夜祭で洗礼の恵みを受け、新たな信仰共同体となった二人を迎え、主の復活を祝うミサが捧げられた。今年は例年にない豪雪に見舞われ、大変な冬だったので、なおさら春の訪れを告げる「復活祭」の喜びは大きかった。

4月15日(神のいつくしみの主日)、十字架と約30人の信徒を乗せたバスは新庄へ。途中から辺りの景色は白い世界へと変わり、教会周辺も2メートル近い雪がまだ残っていた。教会へ続く坂道を十字架を先頭に進むと、聖歌で迎える新庄教会の信徒の姿が見えてきた。その歌声は「十字架リレー」とともにやってきた遅い春を喜ぶかのように。

## 「歌うことは祈ること —— あなたは何語で歌い(祈り)たいですか？」

マリア 東 玲子



2010年11月の献堂式以来、新庄教会にほぼ毎月1回のペースでオルガンを弾きに行っています。この間に感じたこと、考えていることを少し書かせていただきます。

ご存知のように、新庄教会の信者さんは、ほとんどが結婚してフィリピンから日本に移住してきた女性たちです。教会の建物がなく、公民館の1室などを借りてミサをあげていた間、アカペラで、あるいはギター伴奏で、タガログ語のミサ曲や聖歌を歌ってミサを捧げていたのだと思います。今でもフィリピン人の神父様が司式をするときには、タガログ語のミサ曲を聴くことができます。

教会という建物ができて、オルガンを寄付して下さる方がいらして、そのオルガンを弾く人が現れて、日本語のミサ曲と日本語の典礼聖歌が歌われるようになりました。もちろんこれまで、日本の他の教会でミサにあずかる時には歌って(聞いて)いたかもしれません。1ヶ月に1回は、こうした

ミサがあげられるようになって、良かったのかどうか、いつも迷いながら弾いていました。余計なおせっかいや、押し付けなのではないかと…。

去年のことです。一人の女の子が高校を卒業して社会に出て、これから山形を離れて一人暮らしをするという、その出発前のミサで、答唱詩篇を歌ってもらいました。「今から日本のどこの教会に行っても典礼聖歌が歌えるからね」と、励まして送り出すことができたとき、急なお願いでしたが歌ってもらって良かったと思いました。私自身、山形に引越してきた時に、誰も知り合いのいない山形教会を初めて訪れて、以前通っていた教会と同じ典礼聖歌集を手にして、どんなに安心してミサにあずかることができたことか…

今年は、新しい挑戦を始めました。それは、タガログ語の聖歌の楽譜を作ることです。献堂以来、私がタガログ語で歌えるのは「主の祈り」(Ama Namin)だけでした。それは、「楽譜」があるからできたことなのです。それならば、と一念発起しました。信者さんたちが歌いたいタガログ語の聖歌のCDを聞き、歌詞カードと照らし合わせておたまじゃくしを並べます。タガログ語が読めない人にも歌えるように、歌詞に振り仮名をつけて、やっと1曲できました。それが、教区100周年の十字架とともに新庄教会に行き、皆さんと一緒に歌ったTanging Yamanです。

神様の前に集う私たちが、一緒に歌う(祈る)こと、そのひとつひとつの機会を大切にしたいと思います。そのことを新庄教会の皆さんから教えていただきました。これからもどうぞよろしくお願いします。

2012年3月25日 第1回 分かち合いより

# 『主の名が誉め 讃えられますように』

イグナチオ 中村 遼

主の名が誉め讃えられますように。全能の父である神と、兄弟の皆さんに告白します。わたしは罪を犯し、その罪の故に、病を得ました。

わたしはさまよい歩きました。「人に愛してもらうには、自分じゃない誰かになるしかない」 そう思っていました。だから、親や友人、教師に愛されている人を見つけては、必死にその人になろうとしていました。わたしのことも、同じように愛して欲しかった。でも、うまくできなかった。「わたしには生きている価値がない」 そう感じずにすむなら、一瞬でもそれを忘れられるなら、何にでも手を出しました。快楽を得ました。富を得ました。名誉を得ました。でもだめなのです。むなしくてむなしくて、自分が消えてしまいそうです。親や周りの人が見ているのは、わたしじゃないから。わたしの見かけだから。わたしの胸には、暗くて深い穴が開いていて、冷たい風が、そこからわたしに向かって吹きつけてくるのです。わたしは寒さに震えていました。わたしは誰かに、「君には生きている価値がある」と言われたかった。でも、誰も言うてくれませんでした。

イエスよ、…あなた以外の、誰も言うてくれませんでした。

イエスよ、…あなたのやさしい瞳を見ていると、胸がいっぱいになって、涙があふれ出ます。

イエスよ、…愛しています。わたしを抱き寄せてください。あなたはわたしを避けず、わたしを抱きしめてくださる。わたしの目を見て、わたしの話に耳を傾けてくださる。父や母ですらわたしを避けるのに、あなたはわたしを避けない。わたしの目から涙がこぼれ落ちる。あなたの手、足、わき腹の傷



に触れる。わたしのために耐え忍んだ痛みに触れる。あなたの愛の深さに胸が打たれ、滝のように涙がながれ落ちる。あなたがわたしのために失った命と、流した血と、体に受けた傷で、わたしは愛を知った。本当

の愛を知った。神がどんなにわたしを愛してくださっているか知った。神とは愛そのもの。愛とはあなたのこと。あなたはすべてを持っていたのに、わたしのためにすべて失った。主よ。あなたこそ愛です。本当の愛です。

今、わたしはあなたに立ち返り、あなたの胸の中で泣きます。わたしをゆるしてください。わたしは罪を犯しました。わたしは間違っていました。あなたに命を頂いた瞬間から、わたしは間違っていました。父や母を愛するより、自分の命を愛するより、もっと深くあなたを愛していれば、こんなにも長い間、自分を見失うことはなかった。

イエスよ。わたしは自分の命を守ろうとするあまり、かえって自分の命を失いそうになりました。父は、あなたの子どもでした。母も、あなたの子どもでした。そしてわたしも、あなたの子どもです。あなた以外に愛はありませんでした。父にも、母にも、わたしにも、愛はありませんでした。愛はあなただけでした。主よ。今こそわたしを抱きしめてください。

御父よ。今こそわたしの咎をゆるしてください。わたしはあなたに立ち返りました。わたしを受け入れてください。あなたこそわたしの愛。わたしの本当の愛。生まれてからずっと探していた、わたしの本当の宝です。

兄弟の皆さん。わたしは探していた物を見つけました。いや、迷い出た羊を、神自らが探し出してくださった。囲いから迷い出た一匹の羊を、懸命に探し出される方。狼から羊の命を守るために、自分の命を差し出される方。わたしたちのいつくしみ深い主の名が、誉め讃えられますように。

## フォトグラフ



十字架リレー 新庄へ 4月15日(日)

まだ雪の壁が残る坂道を行列が進み、新庄教会へ十字架が到着。記念のミサが捧げられた。ミサ後、新庄教会の4人の信者がこれまでの体験を話された。フィリピンから嫁がれ、言葉の障害や様々な苦勞を思い出し、涙する人もいた。しかし、そんな困難を乗り越えられたのも、彼女たちには「神様がいつも一緒」という強い信仰があったからこそ…。交流会が始まる頃には、いつもの明るい笑顔に戻っていました。



墓地ミサ 5月13日(日)

やわらかな春の陽射しのなか、墓地ミサと掃除が行われた。爆弾低気圧によって崩れたマリア像背後のブロック塀もきれいに直された。また、花壇には春の花々が色とりどりに咲きそろっていました。